分科会⑤

東日本大震災の被災地域における心のケアと予防的見地
～自然災害後の我が街、我が暮らしの回復と支援のために～

片柳　光昭　みやぎ心のケアセンター　せんだいG&Aクリニック

SSTの経験交流ワークショップでの分科会としては、異色の内容とお感じになるかもしれない。タイトルにSSTの文字はなく、SSTを感じさせるメッセージもない。しかしながら、東北の地で開催される本大会から、そして東日本大震災の被災地での心のケアに従事している一支援者から、今も、いや、今だからこそ伝えなければならないテーマであると考える。演者は東日本大震災後の宮城県内の被災地域の心のケアを担う組織である、みやぎ心のケアセンターの職員として、現在もその支援に携わっている。これまでの支援から、被災地では時間の経過が必ずしも回復につながるわけではなく、復興の過程に伴うさまざまな生活課題と精神的健康の悪化や低下、災害時のトラウマ体験による長期化する影響、あるいは地域の支援者が抱える心理的負担感など様々な課題が生じ、それらに対応することが求められてきたと振り返る。東日本大震災から13年の年月が流れ、社会的な関心が薄れゆく中であったとしても、被災地の経過と実情を発信することは、将来に発生する大規模災害後の支援に極めて重要であると考える。

そこで、本分科会では、東日本大震災後の被災地域の住民、そして地域の支援者への支援を通じて得られた知見をお伝えし、それらについて共有する。特に、応急仮設住宅の入居から自宅再建や災害公営住宅の入居にあたる中長期的な時期における、被災者への支援について、また直接被災はしていないが間接的に影響を受けている住民へ支援、被災コミュニティーへの支援、さらには外部支援者が地域で支援をしている支援者を傷つけることなどを中心に報告することを予定している。その中では、子ども、10代の若者への支援の実践から、災害が心の成長に及ぼす影響、また相談や面談の中で常に心掛けていたことなど、支援の実際について理解を深めていただけたらと考えている。

しかしながら、本分科会の最終的な目的は、震災支援の経験を共有することではない。それ以上に、長期的支援から得られた知見を、将来起こり得る参加者ご自身の我が街、我が暮らしの回復や支援の準備に活かしてもらうことである。また、その準備の一つとしてSSTができることについても議論を試みたい。当日は、前半に演者からの報告を行い、後半に参加者同士でのグループワークを実施する。

災害はスマホの画面に映るものではなく、この先の我が事としてお考えいただく機会になれば幸いである。